同文の朋

―漢字による交わり―

浜田　道雄

もう半世紀も前のことになるが、タイ内務省の政策顧問をしていたころ労働局の次長とミャンマーとの国境に近い山地の民の村を訪れたことがある。チェンライから五〇キロあまり北に行ったメ・チャンでジープに乗り換え、ひどいデコボコの山道を一時間あまり揺られてようやくたどり着いたアカ族の村だった。

その村で村長の家を訪れ、いろいろと話を聞いているうちに彼の背後にある屏風に眼がいった。たくさんの人が集まって賑やかに宴会をしている様子を描いたもので、その上に結婚を祝う賀詞らしい漢詞が達筆な筆で書かれている。気になったのはその賀詞だ。

すぐに村長に「これは誰かの結婚を祝う屏風のようだが」と尋ねると、三〇年ほど前に彼が結婚したときの祝いものだという。ここから話が弾んだ。

私の質問に驚いた村長は「あなたはこの詞が読めるのか」と尋ね返してきた。

「もちろん。日本では学校で漢文を教えるから、この程度の漢文は読める。もっとも日本式の読み方で、日本語として読むのだが」

そういって賀詞を日本語で読み下し、その内容を説明すると、村長はすぐに応じてきた。

「私たちもこれを中国語ではなく、アカの言葉で読むんだ」

そういって賀詞を彼らの言葉で読んでくれた。

すると、労働局の次長も割り込んできた。「若いとき中国の潮州で学んだから、私もこの詞は読める」といい、賀詞を読み上げた。彼の読みは潮州語だった。

そこに不思議な共感が生まれた。遠く離れた国に生まれ、異なる文化のもとで育った三人が、いま一つの漢詞を「中国語」ではなく「自分たちの言葉」で読み、そして互いに理解しあう。漢字が表意文字だからこそできる技であり、これこそが漢字を介した「同文の朋の交わり」ではないのかとの思いである。

かつてともに暮らしていた家族が長い歴史のなかで離ればなれになったあと、いま再び巡り会った。そんな懐かしさも胸にわきあがる場でもあった。

文化人類学者には、アカの人々の民俗には古代日本のそれと似たところが多いという人がいる。アカの村の入口を守る門の上には木彫りの鶏が置かれているが、これが「鳥居」と同じだというし、春と秋の収穫を祝って行われる「歌垣」も同じだ。納豆、味噌などの発酵食品を多く食べるところも似ているという。

もしかすると、はるかな昔アカの人々と私たちの先祖はどこかの地で同じ文化をもって暮らした仲間だったのかもしれない。そんな思いも心によぎる不思議なひとときだった。

（二〇一三・一〇・二六）